





ボードレス・エリア近江八幡芸術祭  
「ちかくのまち」  
2020年9月19日(土)~11月23日(月・祝)

【出展者】久保寛子、小西節雄、坂本三次郎×椎原保、杉浦篤、  
鮎万里絵×谷澤紗和子、武友義樹×福留麻里、ドゥイ・ブトロ×  
ナワ・トゥンガル、平野智之、ヤマガミユキヒロ、米田文  
主催：アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会  
後援：滋賀県教育委員会、近江八幡市教育委員会  
助成：令和2年度文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

「ちかくのまち」は、近江八幡のまちを舞台に、アーティストやサポーター、地域の方々などが参加し、みんなで作る芸術祭です。誰もが交流できる場を形成することを目指した「ボードレス・エリア近江八幡」をみんなで作るプロジェクトの一環で開催しています。

展示会場では、知覚を刺激する10組の作者による作品を展示しています。本稿では、展示作品の中から、鑑賞のあり方を広げる展示や、作者が別の作者と感覚をすり合わせて作った作品を紹介したいと思います。

杉浦篤さんの作品は、旅行風景や家族とのスナップ写真。写真の角が丸まり、表面が削れているのは、毎日触れ続ける杉浦さんの表現行為の蓄積によるものです。杉浦さんの作品を展示しているNO-MA

では、作品と合わせて触れることのできる作品のレプリカや、触図、被写体の実物(枝や砂、落ち葉など)を展示。加えて、写真のディテールを拡大して見ることで、できるリープモーション※1という機器を使った展示も

行っています。これらの展示は、目の見えない人、見えにくい人に作品を楽しんでもらうための試みですが、触って鑑賞するという、鑑賞の可能性を広げるものでもあります。それらを体感することで、杉浦さんの作品の奥深さを多面的に味わうことができます。

屋外展示スペースでは、自然の中で、開放的な気持ちに浸りながら作品に出会えます。安土町にあるよしきりの池には、坂本三次郎さん×椎原保さんによる作品があります。坂本さんはかつて、所属する福祉施設の敷地に、拾ってきたものを陣形のように配置して、新たな空間をつくり出す行為を繰り返していました。椎原さんは、そんな坂本さんの感覚に寄り添い、池のほとりに空間をつくりあげています。坂本さんが制作していたところとは、場所も違えば、拾えるものも違うので、完全な再現ではありませんが、椎原さんは坂本さんになりきって場を作っていました。ものの配置は、展示会開催後も少しずつ変化しています。日々、移ろいゆくその景色は、進行形のアートと言えます。

この芸術祭の舞台となっている



のは、NO-MAと奥村家住宅がある近江八幡旧市街地エリアと、琵琶湖の内湖である西の湖のほりにある屋外エリアです。また、それぞれの会場では、デジタル技術を使ったインスタレーションや、作者同士の関係性から生み出された作品、広範囲に広がるダイナミックな作品など、多彩な作品を展示しています。知覚にあるこのまをぜひ体感してみてください。

※1 ジェスチャーによりコンピュータの操作ができる装置。リープモーションに手を近づけたり、遠ざけたりすることで、映し出された杉浦さんの作品画像を小さくしたり、大きくしたりすることができます。

ノマ Topic of NO-MA トピ

ちかくのまち来場者ピックアップ  
山口少年は青年になり、そして。

文：田端一恵(企画事業部長)

「ちかくのまち」開幕初日の9月19日(土)、やわらかな雰囲気をもった男性が展覧会を訪れた。山口秀さん、長野県に暮らす23歳の青年だ。山口さんが野間の中に登場するのは2度目※2である。鮎万里絵展を見て岩手から訪れた少年として紹介された当時は、14歳の中学生、丸刈りの野球少年だった。鮎万里絵ファンの山口さんはその後、鮎さん本人と出会い、親交を深めている。就職した時計製造会社の配属先が鮎さんの暮らす長野という偶然も何らかの縁に思える。

初日の、しかも開館直後に訪れた山口さんがまず目にしたのは、バタバタと掲示物を貼り、展示の微調整をしているス

タッフの姿であった。その様子をやさしげに見守っていた山口さんは「初日に来ると、ああいう風景が見られるのか。みんな大変そうだったけど勉強になった」と後に語る。

美保さんガイドを借り、1時間ほどかけてNO-MAの展示をじっくり鑑賞した後は、美保さんガイドお薦めのあじから定食を食べに初雪食堂へ。中学生のときにも食べたボリュームたっぷりの定食に舌鼓を打ち、午後はNO-MA記者クラブ説明会にお忍びで参加。記者クラブのみなさんの参加の動機を聞いて「文章を書くのが好きとか、自分が思った感想を他の人にも伝えたいっていう人たちがいることにびっくりした。自



分には絶対あり得ないことだから」としみじみ感心。

奥村家で、鮎万里絵作品に對面。「万里絵さんが進化している…」これが今回の鮎作品を見て思ったことだそう。マットの破片を利用した作品や切り絵など、今まで見たことのないタイプの作品があったり、他の作家とコラボレーションするとは想像もしなかったとのことで新鮮だったそう。

美保さんガイドを首から下げたまま再びまちへ繰り出し、Kolmioでクレープを楽しみ、Going Nuts!で大好きだというナッツを目一杯袋に詰める。気づけば16時を過ぎていた。大急ぎでB&G海洋センターとよしきりの池会場へ向かう。小



西節雄カカシ作品に紛れて写真を撮ったり、この日も制作を続けていた椎原保さんから解説を聞くうちに、あっという間に17時になってしまい、小走り美保さんガイドを返す。

仕上げに安土駅前の万吾樓へ行き、銘菓まけずの鰯とオリジナル大福を妻のお土産に買い、黄色のランクル(自家用車)で長野に帰っていった。

そう、山口少年は青年になり、自分の家庭を持っていた。

※2 一度目はvol.11(2011年9月)。NO-MAホームページのアーカイブから見るすることができます。



<http://bit.ly/nomanoma11>



カルチュラル・デモクラシー：  
芸術を楽しむこともボーダレスに  
— 芸術とアクセシビリティの関係について —

文：石田瞳（自立生活支援員）

[後編]

※前編と合わせてお読みいただくと、より理解が進みやすいと思います。NO-MAホームページのアーカイブからぜひ前編もご覧ください。



昨年度、障害のある人のアクセシビリティ（社会参加のしやすさ）の向上を目指して、ボーダレス・アートミュージアムNOMAの企画展を題材に高次脳機能障害の人、盲ろうの人、発達障害の人とともに楽しむ芸術鑑賞会を開催しました。前編で紹介したカルチュラル・デモクラシーの視点を軸に、障害のある人のアクセシビリティの拡充とは何を意味し、芸術から見ていくべき支援のあり方とは何か、これらの実践を通して考察します。

「高次脳機能障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」では、学芸員によるギャラリートークと選べる3つのアクセシビリティを実施し、最後は、全員でお茶を飲みながら交流しました。作品を分かりやすく紹介した「鑑賞会ガイド」は、ルビありとルビなしの2種類を作成しました。参加者からは「楽しかった」「もっと交流会をしてほしい」という声が上がりました。

「盲ろうの人と楽しむ芸術鑑賞会」では、まず前半で作品を触って鑑賞し、後半では、粘土を使って作品制作をし、参加者同士で作った作品を鑑賞しました。盲ろうの人を対象に事前レクチャーを行



「高次脳機能障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」のお茶の時間

い、鑑賞会では、通訳介助者が通訳しやすいように、簡潔な言葉を使ってゆっくり話しました。盲ろうの方、一般参加の方からは「意見の交換ができて楽しかった」という感想が寄せられました。

「発達障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」では、学芸員のナビゲートのもと展示会場を巡り、参加者同士で、また一人で鑑賞し、最後に振り返りを行いました。振り返りでは、「何を言ってもいい、何も言わなくてもいい、否定はしない」というルールを設けました。「いろいろな方々が交流して共感できる機会を深めてほしい」という意見をいただきました。

当事者や支援者とともに企画したこれら3つの鑑賞会では、交流や共感の場が生まれました。それは、鑑賞会の会場となったNOMAにカルチュラル・デモクラシーがあったことを意味しているのではないのでしょうか。芸術を提供するゆえに、という関係を超えて、誰もがそれぞれの方法で芸術を楽しむ選択ができる場になってきたと考えられます。

ここで最初に提起した問題に戻りたいと思います。障害のある人



「盲ろうの人と楽しむ芸術鑑賞会」の制作の様子

のアクセシビリティの拡充とは何を意味するのか。すべての人が同じ体験ができることではなく、誰もがそれぞれの方法で人生を楽しむことができるように、それを可能にする関係を発展させることがアクセシビリティの拡充ではないでしょうか。

芸術から見えてくる支援のあり方とは何か。カルチュラル・デモクラシーに見られる参画者同士の互いの声や権利を認め合う関係ではないのでしょうか。これは芸術とともに楽しむことで導き出される考察です。芸術を通して、支援のあり方への気づきが生まれるのです。



「発達障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」での振り返り

地域インタビュー  
ohmi-hachiman local interview

人が出会い繋がりが生まれるお店を、  
いつまでも続けていく

三松

北村美恵子さん・赤崎三四子さん  
岡田紀子さん・川原真希さん

文：樽見拓樹（自立生活支援員）

▼三松の皆さん/左から北村さんのご主人 連一さん、川原さん、赤崎さん、北村さん、岡田さん



と誘われてお店で働くことになり、30年近くなるという。「お年寄りでも来やすいお店やからな。いつまでもそういう雰囲気であってほしい。親しく来ていただけるお店でありたい」と赤崎さんは語る。

人が自然と出会える魅力のある三松のこれからについて、北村さんに聞いてみた。「だんだん歳とともに、世代が交代していくんですけども、安心して次の世代に譲れるお店になれたらいいなって思います」。お惣菜は特に下仕事から手間がかかる。皆で支えあって初めて三松は成り立っている。

人との繋がりを大事にする北村さんがいるからこそ、三松は人が自然と出会うことのできる場所となり、店員の皆さんやお客さんもお店を好きになるのだろう。皆が持ち味を生かして働いている三松には、これからも人が集える場所であり続けるような安心感があつた。

お客さんの友達もたまたま来ていてばったり出会うというようなことが、しょっちゅう起きているというから驚きだ。「人がちゃんと繋がっているのを見ていると良かったって思うから、大好きです」と川原さんは語る。

勤続7年目の岡田紀子さんが三松で働き始めたきっかけも、人との繋がりが大きく関係している。「ちょうど人手が足りなかった時に、うちの親がしょっちゅう買いに来ていて、声をかけられたらしい。手伝ってくれる人いいひんかになって」。岡田さんは当時別の場所でも調理の仕事をしていたこともあって、その誘いを受け掛け持ちで働き始めたそう。三松について岡田さんは「ホッとするようなこの雰囲気がずっと変わらないでほしい」と語る。

北村さんの親戚である赤崎三四子さんは「ちょっと手伝ってくれへんか」

NO-MAの職員もよく足を運ぶお惣菜屋さん、三松は、NO-MAから歩いて10分ほどの場所にある。お店の扉を開けるとレジに座った北村美恵子さんが笑顔で出迎えてくれる。美味しそうな惣菜と店員の皆さんの笑顔に触れると、なんだかホッとします。お店を支える4人の女性店員さんに話を伺った。

皆からお母さんと呼ばれている北村さんは、三松を営むこの家に生まれ、43年間三松で働いている。「来ていただいた方にね、気持ちよくなっていたきたいですね」と語る北村さんは、人との繋がりを大事にしている。実際、インタビュー中も北村さんはお客さんに気を配り、まめに声をかけていた。

働き始めて2年目の川原真希さんは、三松を「人が出会える場所」だと話す。知らないお客さん同士が世間話をしていたり、お客さんがお店に来るとその



美味しそうなお惣菜がたくさん並べられている店内▶

あのひとの  
近江八幡  
スタイル



◀ 明治20年から続いているお店

## NO-MA関連メディア

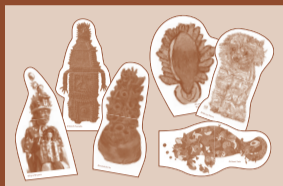
.....&lt;NO-MAグッズのご案内&gt;.....



## NO-MAグッズ

トートバッグ、クリアファイル、メモ帳

アール・ブリュットの作品画像を用いたメモ帳やトートバッグなど、NO-MAの店頭やホームページからお買い求めいただけます。

トートバッグ 1,000円  
クリアファイル 380円  
メモ帳 380円

.....&lt;NO-MA企画展グッズのご案内&gt;.....

2020年11月23日まで開催中のボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」、出展作家・鮎万里絵の書籍、ポストカードなど多数販売しています。



.....&lt;NO-MA 公式フェイスブック&amp;ホームページ&gt;.....

企画展展示の様子やNO-MAで出展いただいている作家の情報など、NO-MAや障害者の文化芸術に関わる情報を掲載しています。NO-MAのホームページとあわせて、ぜひご覧ください。

NO-MA 公式フェイスブック

<https://www.facebook.com/museumnoma/>

NO-MA 公式ホームページ

<http://www.no-ma.jp/>

## イベント情報

## アートをきっかけに

## いろんな感じ方をシェアしよう!

アートの言葉にしにくい部分を様々な鑑賞方法で味わったり、それぞれの感じ方を共有する鑑賞会です。

2020年11月22日 13:45~15:30

【近江八幡コース】

会場: NO-MA、奥村家住宅

定員: 10名(要予約)

案内人: 横井悠(NO-MA主任学芸員)

対象者: 発達障害の人、発達障害の傾向があると思う人、長い説明を聞くのが苦手な人、会で意見を言うのを負担に感じる人、この鑑賞会に関心がある人

参加費: 無料

## エデュケーションプログラム

## みんなで作る学び・交流の場イベント

本芸術祭で学びや交流の場の企画を担うエデュケーションサポーターが、「ちかくのまち」のプログラムとして、アートと楽しく出会えるイベントを立ち上げます。

出展作家の表現から着想したアート体験や、芸術祭のテーマ「知覚」を掘り下げるワークショップなどをご用意して、皆様をお待ちしています。それぞれのプログラムを周遊するツアーもございますので、ぜひご参加ください。

2020年11月21日 13:30~

ファシリテーター: エデュケーションサポーター

※詳細はこちらから

<http://www.no-ma.jp/?p=21704>

## 第17回

## 滋賀県施設・学校合同企画展

本展は、県内の障害福祉施設等の支援員と障害者の美術活動に造詣が深い専門家、NO-MAが実行委員会を組織し、企画・展示を行っています。障害のある人に日々寄りそう支援者ならではの目線で、作者個人、作品一つひとつの魅力を引き出す展示を試み、県内をはじめ全国にその情報を発信することや、施設職員および教員の情報交換の場とすることを目的としています。

2020年11月28日~2021年2月7日

(前期)2020年11月28日~12月27日

(後期)2021年1月9日~2月7日

会場: NO-MA

開館時間: 11:00~17:00

休館日: 月曜日(ただし祝日は開館し、翌平日休館)

2020年12月28日

~2021年1月8日

(年末年始、展示入れ替え)

観覧料: 一般200円(150円)、高大生150円

(100円)、中学生以下無料

※障害のある方と付添者1名無料

※( )内は20名以上の団体料金

事務局: 第17回滋賀県施設・学校合同企画展

実行委員会事務局

〒521-1311

滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837番地2

社会福祉法人グロー法人本部企画事業部内

TEL:0748-46-8100

FAX:0748-46-8228

## 【編集後記】

「一生に一度の誕生日がもうすぐやってくる」と話す男の子。「これから何回も誕生日はくるよ」と私が言うと、やれやれ...という顔で、「11歳の誕生日は初めて最後でしょ」との返事。単身赴任中のお父さんが帰ってきて、家族みんなで祝う誕生会を待っている。——そうか、最初であり最後なんだ、全ての出来事は。

私はこれまで様々なことを経験し、喜んだり、驚いたり、怒ったりしてきた。変わり果てた神戸の街を映すニュースを見た時や、大きな爆発音と「ああ」という叫び声が混ざった福島からのラジオを聞いた時は、絶望や諦めにうちのめされそうになったりもした。最近、自分の感情を包む外側の皮が固くなり、センサーがめっきり鈍くなったように感じる。そんな自分に抵抗すべく、何かの記事を読み、「日々生まれて初めて経験するように暮らす」ことを試みたが、私にはしっくりこなかった。

でも、冒頭の男の子との会話の後、私は発見した。「これが最後の一回だ」という目で世の中を見ると、8Kを超える(?!)高画質&高音質リアルさで世界が近づいてくることを！これまでよりも、世の中が色鮮やかで、輪郭が際立ち、かすかな音が空気を揺らすのを感じ、そして心が震え出す。特に夕暮れの時間など、理由もわからず涙ぐんでいるのを見かけられたら、「ああ、最後の一回なんだね」と見て見ぬふりをしてくださるとありがたいです。

(編集担当 山口有子)



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



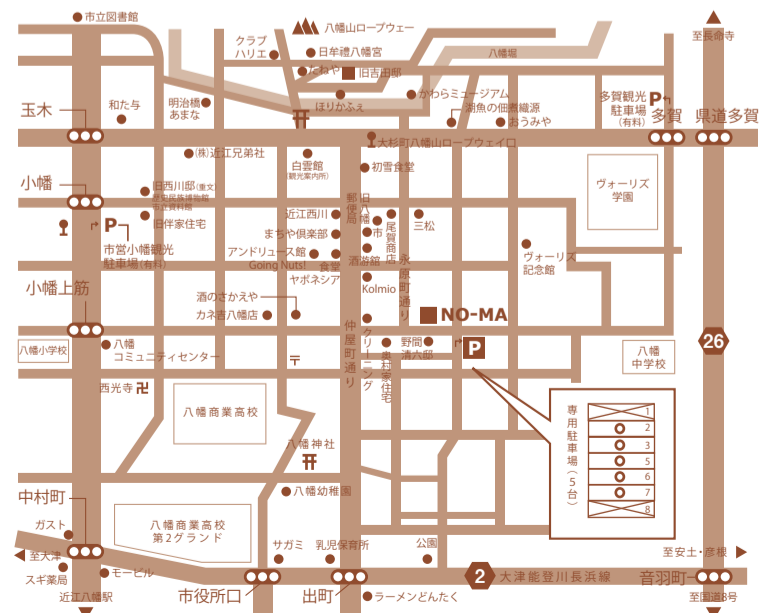
滋賀県近江八幡市永原町上16

TEL/FAX 0748-36-5018

休館日: 月曜日

(月曜日が祝日の場合は翌平日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

<http://www.no-ma.jp>

バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町八幡山ロープウェイバス停下車 徒歩8分

車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)